

## 課題研究ハンドブック Chapter 3 (試作版)

### ～リサーチ・スキル1～

#### リサーチ・スキルについて

リサーチのなかでも、とくに**仮説検証型**のリサーチ等では、仮説のどれが正しいか、あるいはどれも間違いなのか、調べなければなりません。そのためにも、どんな対象の人を調べるのか(＝調査対象)、どんな方法で調べるのか等も決める必要があります。そして、結果の「分析」には、「統計」やグラフが用いられます。それでは、『基礎演習ハンドブック』(関西学院大学総合政策学部、2012)等を参考に、リサーチ・スキルを具体的に説明しましょう。

#### 具体的な方法について

リサーチには種々の方法がありますが、Chapter3とChapter4では、以下の方法を紹介します。

- (1) **公刊データ**の利用
- (2) **インタビュー／ヒアリング**調査
- (3) **アンケート票**による調査(以下、アンケートと略します)

とくに公刊データの利用のコツを会得するのは重要です。まず、犯罪統計や経済データ等は自分たちで集めることができません。一方で、政府やその他の機関が、自分たちが知りたいと思うことに近いデータを集積・公表していれば、それを使って自分たちの仮説・主張が証明できるか、分析できます。とくに国際問題等では、公刊資料を自分でさらに分析しないと、わからないことが多々あります。

対照的に、自分で資料を集めるのが(2)(3)です。インタビュー調査やアンケート票による調査は、高校生の皆さんにも、なじみがある方法かもしれません。(2)が少数の方を対象とした定性的調査(**質的調査**)の色彩が濃いのに対して、(3)は大量に回収したデータを統計的に処理する定量的調査(**量的調査**)です。本当は、「深い狭い」インタビューと「浅い広い」アンケートの双方を組み合わせることこそ望ましいのですが、実際には、時間的な制約等でどちらか一方を選ばざるを得ないことが多いようです(佐藤、1992)。

#### 公刊データをうまく使いこなそう

現代は、膨大なデータがWebで公開されています。例えば、日本政府による統計データは「**e-Stat：政府統計の総合窓口**」で公開されています(総務省HP)。国民の税金を使っておこなわれた調査は、その税金を負担した国民に広く公開されなければならないのです。ということは、皆さんも、こうしたサイトから、リサーチのためにどんどんデータをダウンロードしましょう。それは国連統計等でも同様です。

ところで、皆さんにとって、どこにどんな社会統計が存在しているか知ることが重要です。そこで、具体的な例として、国際的な貧富の格差の指標として使われる「**一人当たり国内総生産(GDP)**」をとりあげます。GDPとは「その国の人々が(通常)一年間に生み出すことができる新たな価値」を表す指標です。例えば、小麦の種籾からパンが作られますが、その生産・流通プロセスで、様々な人や機械によって新たな「価値」が加えられます。この新たな価値は「価格」で評価され、「利益」として、働いた人と機械(＝その持ち主である株主)に配分されます。そのためGDPは、「その国の人々に分配できる富の総額」も意味します。つまり、一人当たりGDPはその国の人々の平均所得を近似しているのです。

しかし、当然、GDPのデータを個人で作ることはできません。ではどうやって入手できるのでしょうか？ 高校生の皆さんに一番手っ取り早いのは、総務省統計局HPの「世界の統計2016」を調べることでしょう（<http://www.stat.go.jp/data/sekai/O116.htm>）。「3-3 1人当たり国内総生産（名目GDP、米ドル表示）」というタイトルで、エクセルの表としてダウンロードできます。

国際通貨基金（International Monetary Fund, IMF）のHPにはさらに詳しいデータがあります。そこで調べた2005年の国別の一人当たりGDP（USドル表示）を、エクセルで左から低い順に棒グラフに変換したのが図1です（180カ国にもなるので、国名は削除）。最も左に位置する国の一人当たりGDPはほぼ0、最右翼に位置する国は8000ドル近くになります。一ドル100円で換算すると年間800万円に達します。この最も貧しい国と豊かな国はどこでしょうか？

表1に上位20カ国と下位20カ国を抜き出しました。最も貧しい国はアフリカのブルンジで106.9ドル、年間1万1千円弱しかありません。最も豊かなルクセンブルクと約750倍の格差があります。日本は14位で、1年間の平均所得は約360万円です。

肝心なのは、「では、なぜこんなに格差があるのでしょうか？」という疑問です。もちろん、これがわかっているなら、国連もNGOも苦勞しません。教育水準や所有権の設定、民主的な政治システム等様々な要因が指摘されていますが、経済格差は少なくとも現代でも解決できていない問題です。

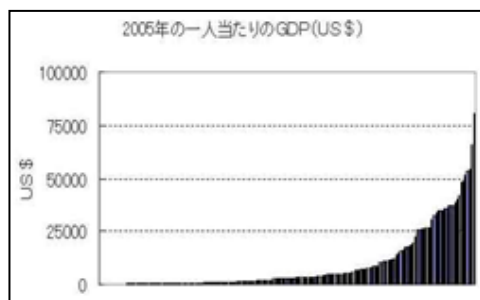


図1 一人当たりのGDP比較（2005）

下位20カ国		上位20カ国	
ブルンジ	106.9	ルクセンブルク	80080.3
コンゴ民主	123.3	ノルウェー	65509.2
リベリア	154.0	アイスランド	54115.7
エチオピア	155.7	カタール	53332.9
ギニアビサウ	190.1	スイス	51277.7
ガンビア	207.0	アイルランド	48705.2
エリトリア	207.4	デンマーク	47905.5
ミャンマー	219.9	アメリカ	41885.9
マラウイ	222.0	スウェーデン	39621.0
シエラレオネ	222.9	オランダ	38871.3
ルワンダ	238.3	フィンランド	37320.2
ニジェール	265.4	イギリス	37303.3
マダガスカル	270.0	オーストリア	37120.2
アフガニスタン	284.5	日本	35671.5
ウガンダ	303.1	ベルギー	35450.7
中央アフリカ	335.4	カナダ	35199.0
タンザニア	336.2	フランス	35043.6
トーゴ	343.6	オーストラリア	34941.5
モザンビーク	348.3	ドイツ	33919.1
ギニア	351.5	アラブ首長国	32391.6
平均	244.3	平均	43783.3

## インタビューや聞き取り

### インタビュー／ヒアリング

公刊されているデータの話から一転、フィールドワークで定番のインタビューやヒアリングに話を移しましょう。最近、政治家や経営者に長時間インタビューして「オーラル・ヒストリー」としてまとめる仕事も増えてきましたが、インタビューや現地調査は研究対象・情報提供者の人々と親しい関係を築き上げながら進めます。その際、取材対象の方々（インフォーマント<sup>1</sup>）への尊敬の念とプライバシーの尊重をお願いします。とくに、インタビューでのやりとりを録音したり、写真を撮影する時には必ず同意や許可をいただきましょう。

それでは、インタビューの実例として、日本の民俗学者で全国各地を訪れ、名もない人たちとの会話から様々な事実を掘り起こしてきた宮本常一の『忘れられた日本人』から、対馬の漁村の成り立ちを語る「梶田富五郎翁」を少し引用しましょう（文章は若干改編）。

**郵便局で局長さんとの村（対馬豆酸村浅藻）の話色々としているうちに、この村の開拓者がたった一人生き残っていることを教えられた。それが梶田翁であった。一つの村の成長をそのはじめからずっとみつめてきた人である。これはたいへんなことである。**

<sup>1</sup> インフォーマント（Informant）とは、フィールドリサーチで情報・データを提供していただいた方をさします。

翁は煙ですすけた家の板間で釣り道具をつくっていた。

「爺さんは山口県の久賀の生まれじゃそうなが、わしも久賀の東の西方の者でう、なつかしくてたずねてきたんじゃが」と話しかけると、「へえ、西方かいのう、へえ、ようここまできんさったのう、はア、わしもひさしゅう久賀へもいんでみんが、久賀もずいぶん変んさつろうのう」

郷里の言葉をまる出して話し出した翁に、初めから他人行儀はなかった。私が「昔のことを聞かしてもらおうと思うて」と一言いうと、「はア、わしがここ来たのも古いことじゃ」と話し出した。(略)

「巖原で問屋と契約して、その年(明治9年)から問屋が浅藻へ納屋をつくることになって、わたしの船は浅藻へ来た。いま、こがいにひらけてええ町になっているが、わしがはじめて来たときア、この浦は木が立ち暗うじよってのう。(略)人も誰もおらん。ないだ(渚)ばたまで木が茂って、木の枝が海につくほどじゃった。たった一軒、浅藻と小浅藻の境の鼻の上に吹き転がすような納屋があった。その下へ平戸の者がブリの建網を入れていて、その番人の小屋じゃった。(略)

「その頃になるとわしもだいぶ物心がついてきて、久賀で菓子屋をするのもええが、身寄りも少ないんじゃし、どこで何をしてもええ身のじゃから、いっそ漁師で暮らそうと決心して、本気で釣漁をならうことにしやした。浅藻もそれからだんだん開けてきて、みんなも鋸や鎌を持っていて、木を伐ったり、土をならしたり、ちょっとは畑もひらいて野菜もつくるようにして、どうやら人の住めるようなところにしたんでござす。(略)

「そねえあタイを1日10枚も釣ってみなされ、たいがいじゃアええ気持ちになるで晩にゃいっばい飲まにゃならんちう気にもなりませい。そういう時にゃア金儲けのことなど考えやアせん。ただ魚を釣るのがおもしろうて、世の中の人がなせみな漁師にならんぬのかと不思議でたまらんほどじゃった。(略)

「はア、おもしろいことも悲しいこともえっとありましたわい。しかし能も何もない人間じゃけに、おもしろいということも漁のおもしろみぐらいのもの、悲しみというても、家内に不幸のあったときくらいで、まアばアさんと50年も一緒に暮らせたのはなによりのしあわせでござす。

だいぶ話しましたのう。いっぶくしましようかい」

日がな1日、昔を知る老人の話をうかがううちに、村のなりたちも、人々の暮らしの移ろいも、その老人が送った人生も、いつのまにか、身に染み込むように伝わってくる。

フィールドリサーチは必ず“相手”がいらっしゃるわけですが、“相手”からの話を聞くうちに、自らの姿も見えてくる＝他者とのかかわりから、自らもより深く知ることができる、これがフィールドスタディの真髄です。もちろん、そのためには、事前に入念な下調べが必須です。尋ねなければならぬ項目をあらかじめ整理し、相手の発言がより理解できるように背景を知っておかねばなりません。

### Family history を探ろう～自らの家族の来し方を調べる～

インタビューの相手ですが、ヒアリングに訪れた役所やNPO/NGO、企業の方などをお考えになるかもしれませんが、皆さんの祖父母あるいは曾祖父母の方に、皆さんの家の“Family history”をお尋ねになるのも興味深いかもしれません。ご自分の祖父母や曾祖父母の方々がどこでお生まれになり、どんな暮らしを送ってきたのか? 意外に知らない事実で驚くことになるかもしれません。

図2は、東北のある県の西部、伝統的な米作地帯の一夫婦とその子どもたちの系図です。これだけでも、明治から大正、昭和を経た近代化において、個々の庶民がどう暮らしてきたのか、伝わってくるものがあります。例えば、この母親は1897～1922年の25年間に10回出産しています(2.78年に

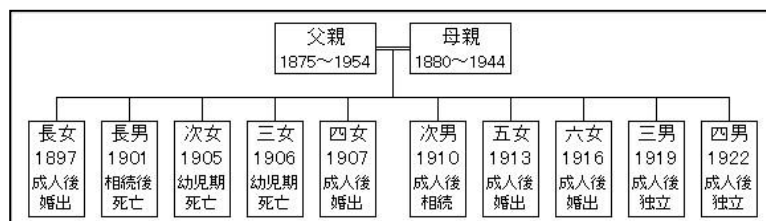


図2 明治から大正にかけての東北の一農家における子供たち

## 高校生が学ぶ課題研究

1回子供を産んでいたことになりす)。男子が4人、女子が6人、そのうち女子2人は幼児期に死亡、8人が成人まで育ちます。さらに長男は家を相続後に死亡し、次男が継ぐことになりすが、残りの7人は(第2次世界大戦もなんとか生き残って)天寿をまっとうします。単純計算ならば、1世代(およそ20~25年)で、人口が2人から7人と、3.5倍に増えたとも言えます。もっとも、田畑は増えませんから、結局は“あととり”をのぞけば、女子は婚出、三男と四男は学校を卒業後、都会に出て、給与所得者になります。

これが明治から昭和にかけて、日本の近代化とともに人口が急増し、その多くは農村生活者から都市生活者に転換していく縮図です。そして、その間に様々な“Family history”が展開されてきたはずで、それをインタビューで聞き取っていくことも、そしてそれらの資料を束ねて、地域の歴史を紡いでいくことも、十分に社会的貢献(Chapter 1 参照)になるかもしれません。

### 聞き書き

インタビューの比重がさらに大きくなると、「聞き取り調査／ヒアリング」に、さらに情報提供者(インフォーマント)の声メインになると、独白体の「語り＝聞き書き」等に移行します。

聞き書きのもっとも優れた例の一つに、アメリカのジャーナリストS・ターケルの『仕事!』があります(ターケル、1983)。プロ野球選手から消防士まで、135人のアメリカ人が、自分がたずさわる115種の「仕事」を淡々と語るさまには圧倒されるだけです。例えば、この分厚い本の冒頭、一人の製鋼所労働者が切り出します。

**おれは滅びつつある人種、肉体労働者だ。ずばり筋肉労働……あげたり、さげたり。一日4、5万ポンドの鉄鋼を扱う。(笑う)……誰かがピラミッドをたてたのさ。なにをたてるにしたって、誰かがたてるのさ。ピラミッド、エンバイヤ・ステートビル、ただなんとなくできた、といううなもんじゃない。うしろにゃ、きつい仕事があるってもんよ……壁にずらっとレンガ工、配電工から何から何まで、ひとりひとりの名前が刻まれているのを見たいもんだよ。それで、おっさんが息子を連れてきたりして「ほら、45階のあそこに、おれの名があるだろ。おれが鉄骨をいれたんだ」という。ピカソは絵を指さすことができる。おれはなにを指させるというのかね。作家は本を指させる。誰もが、指さすことができる「自分の仕事」を持つべきなんだ。**

実は、高校生の皆さんには、「自分にとって仕事とは何か?」、「人生にとって仕事を持つ意味は何か?」を考えていただくためにも、ぜひこの本をお読みいただければ、とも思います。

それはさておいて、ここまで完璧な聞き書きを実現するためには、事前に入念な下調べが必須です。こうして、数時間のインタビューのため、事前準備に何日も費やす努力が要求されるのです。

### 引用文献・Web 情報

関西学院大学総合政策学部編(2012)『基礎演習ハンドブック』関西学院大学出版会。

宮本常一(1984)『忘れられた日本人』岩波書店。

佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク』新曜社。

総務省HP「e-Stat」(<https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>)。

ターケル、S(1983)『仕事!』(中山容他訳)晶文社、1983。

2016年12月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部